川崎医療福祉学会誌　Vol. 18　No. 2　2009　393–400

原　著

「社会的かしこさ」の構造及び，家庭でのしつけ，学校生活経験，地域の教育力との関連

久光達也*1　岩淵千明*2

要　　約

本研究の目的は，社会的な場面や状況への適応を示す「社会的かしこさ」尺度の内部構造を検討すること，そしてこの「社会的かしこさ」と家庭でのしつけ，学校生活経験，地域の教育力との関連を検討することであった．「社会的かしこさ」には「状況判断・課題解決能力」,「他者・周囲への配慮」,「自己表現力」,「感情のコントロール」という4因子構造が認められた．「社会的かしこさ」と家庭でのしつけ，学校生活経験，地域の教育力の3変数との間には正の相関が認められた．また，この3変数が「社会的かしこさ」へ及ぼす影響を重回帰分析によって検討をした．その結果，家庭でのしつけ，学校生活経験からの有意な回帰が認められた．これらのことから，家庭でのしつけと学校生活での経験が「社会的かしこさ」へ影響を与えることが示唆された．

問　　題

現代社会においては，学力や学歴が重要視されている一方，対人関係や社会への適応といったある種の社会的適応能力が求められている．例えば，経済産業省（2006）[1]は，職場や地域社会の中で多くの人々と接触しながら仕事をしていくために必要な能力である「社会人基礎力」といった概念を提唱し，その評価方法や教育への試みをおこなっている．これによると，社会人基礎力を構成する主要な能力として「前に踏み出す力」,「考え抜く力」,「チームで働く力」という3つが存在するとしている（経済産業省，2006）．

社会人基礎力のような概念が提唱されるより以前に，木下（1999，2000）[2,3]は，すでに社会的な能力の必要性を感じ，社会的「かしこさ」という概念で表現した．木下（1999，2000）は，社会的「かしこさ」を「実際に社会で生きて行くための知恵」,「論理よりも道理をわきまえた生活の達人」と定義し，社会－発達心理学的側面を重視した「社会的に成熟した大人」という視点から概念化している．そして，社会的「かしこさ」には大局的発想，状況適合性，相対化の能力，内的世界の広がり，感情の制御という5つの構造次元が存在するとしている（木下，1999，2000）．また，木下（2004）[4]では，社会的「かしこさ」ではなく，社会的かしこさとして表現されており，前述の5つの構造次元について，大局的発想，状況適合性，相対化の能力という事態認識的側面，内的世界の広がりと感情の制御という情緒的側面の2次元から構成されているとしている．

社会的かしこさと類似する概念には様々あるが，ここでは情動知能（Emotional Intelligence：EI）と知恵（Wisdom）という2つの概念との関連性を述べる．まず，情動知能とは「情動の意味および複数の情動の間の関係を認識する能力，ならびにこれらの認識に基づいて思考し，問題を解決する能力」（Mayer， Caruso & Salovey，1999（p.267））[5]と定義されている．つまり，情動知能とは，自他の情動を適切に理解することで対人関係やその他様々な状況に対する対処をおこなうというものである．木下（2004）は社会的かしこさと情動知能の関係について，情動知能は社会的かしこさの下位次元における事態認識と情緒の側面のうち情緒的側面に含まれ，社会的かしこさの構成要因の1つとしている．

次に，知恵とは「重大かつ人生の根本に影響を与えるような実践場面における熟練した知識」（Smith & Baltes，1999（p.495）；高山・下仲・中里・権藤，2002）[6,7]と定義されている．また，知恵を評価するための基準とは，人間の発達やライフイベントへの優れた洞察や困難な問題に対する的確な判断，助

*1 川崎医療福祉大学大学院　医療福祉学研究科　臨床心理学専攻　*2 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　臨床心理学科
（連絡先）久光達也　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学
E-Mail: hisamitsu_tatsuya@yahoo.co.jp

言，コメントができるかについてである（Smith & Baltes, 1990；高山，1997[8]）．つまり，知恵は様々な人生の問題に対する判断や対処という認知に関する概念であり，木下（2004）における社会的かしこさの構造次元での大局的発想や状況適合性といった事態認識的側面と捉えることができる．

これらのことから，情動知能と知恵の両概念は，木下のいう社会的かしこさにおける情緒と事態認識の側面にそれぞれ対応する概念であり，包括性に欠ける．

本研究における「社会的かしこさ」の概念は木下（1999，2000，2004）の理論的枠組みを発展させたものであり，また,「社会的かしこさ」は日々の生活や経験などにより形成，獲得され，学習されるものと仮定している．加えて，筆者らは「社会的かしこさ」を，個々人が自己や対人関係，さらには個人を取り巻く周囲へ環境に対して社会的に適応していくためのスキルもしくは能力と考えている．したがって，筆者らの述べる「社会的かしこさ」とは，基本的に，社会的な適応に関する概念であり，経験などにより形成・獲得されるというものである．この観点から，筆者らは「社会的かしこさ」を「ある個人が，対自己・対他者・対状況を含む様々な社会的状況において適応するための包括的な概念であり，全発達段階を通じて形成・獲得される社会を生き抜く力（社会的知恵)」と暫定的に定義している．

「社会的かしこさ」の実証的な検討をおこなうために，筆者らはこれまで「社会的かしこさ」尺度の構成に努めてきたが（久光・岩淵，2006[9]；岩淵・久光，2006[10] など)，尺度構成は未だ十分とは考えていない．特に，久光・岩淵（2006）において構成した「社会的かしこさ」尺度には6因子構造（「状況判断・課題解決能力」,「他者・周囲への配慮」,「自己表現力」,「感情のコントロール」,「大局的発想」,「内面的世界の充実」）が認められたが，その内部構造の検討は未だ十分であるとは言い難い．本研究の第1の目的は「社会的かしこさ」の内部構造の再検討をおこなうことである．

次に,「社会的かしこさ」の形成に関わると思われるいくつかの変数を取り上げ，これらの変数と「社会的かしこさ」との関連を検討する．ここでは，家庭でのしつけ，学校生活経験，地域の教育力という3変数を取り上げる．なぜなら，これらはいずれも「社会的かしこさ」の形成過程で関与していると考えられる変数である．家庭でのしつけでは親と，学校生活経験では同年齢を中心とした仲間集団と，そして地域の教育力ではギャング・グループといった仲間集団や大人との関わりのなかで様々な対人相互作用及び経験が得られるからである．この3変数は，小泉（2002)[11] が家庭や学校，地域社会の連携による教育をおこない，社会性の形成や教育の実施の必要性を指摘しているように，相互に関連し合っていると考えられる．

本研究ではこの3変数を「社会的かしこさ」との関連を以下の2つの方法で明らかにする．まず,「社会的かしこさ」と家庭でのしつけ，学校生活経験，地域の教育力との関連性を相関分析によって検討し，上述の3変数と「社会的かしこさ」との間に正の相関が得られることを示す．続いてこの3変数から「社会的かしこさ」への影響を検討し，この3変数は「社会的かしこさ」へ正の回帰を示すことを明らかにする．

方　法

対象者

中国および関西圏内の大学生と大学院生562名（男性214名，女性346名，不明2名）である．平均年齢は19.61歳（標準偏差1.45）であった．調査は2007年12月～2008年1月にかけて実施した．

質問紙の構成

「社会的かしこさ」 久光・岩淵（2006）の「社会的かしこさ」尺度（69項目）を使用した．久光・岩淵（2006）では，下位因子として,「状況判断・課題解決能力」,「他者・周囲への配慮」,「自己表現力」,「感情のコントロール」,「大局的発想」,「内面的世界の充実」の6因子構造が認められている．本尺度においては,「それぞれの質問があなたにどれほど当てはまると思いますか」という教示を示して回答を求めた．回答形式は，各問に対して「1：全く当てはまらない」から「5：よく当てはまる」までのいずれかを選択させる5段階評定で，得点が高いほど「社会的かしこさ」が高いことを示す．

家庭でのしつけ 子どもの頃のしつけ経験測度（若林・後藤・鹿内，1986)[12] を使用した．下位因子として「女性役割」,「男性役割」の2因子構造が認められている．各項目に対して「あなたは，子どもの頃両親からどの程度求められたり，経験させられたと思いますか」という教示を示して回答を求めた．回答形式は，各問に対して「1：全く当てはまらない」から「4：非常に当てはまる」までのいずれかを選択させる4段階評定で，得点が高いほど子どもの頃のしつけの度合いの経験が高いことを示す．なお，本尺度を使用するにあたり，各因子の因子負荷量の高い項目3項目，計6項目を使用した．

学校生活経験 中学・高校における学校生活経験測度（若林・後藤・鹿内，1986）を使用した．下位因

子として「文化と教養」,「クラスの人気者」,「リーダーシップ」,「流行追随」,「学業成績優秀」という5因子構造が認められている．本尺度を使用するにあたり，各項目に対して「あなたは，自分の中学生活や高校生活の中でどの程度経験したと思いますか」という教示を示して回答を求めた．回答形式は，各問に対して「1：全く経験しなかった」から「5：非常に経験した」までのいずれかを選択される5段階評定で，得点が高いほど中学，高校における学校生活での経験が豊富であることを示す．なお，本尺度を使用するにあたり，各因子の因子負荷量の高い項目3項目，計15項目を使用した．

地域の教育力　地域の教育力の充実に向けた実態・意識調査（子どもの体験活動研究会，2003）[13]より,「地域社会とのかかわり」から9項目と，スポーツクラブ等に関する1項目の計10項目から構成されている．本尺度を使用するにあたり，各項目に対して「あなたは，高校を卒業するまでにどの程度経験したと思いますか」という教示を示して回答を求めた．回答形式は，各問に対して「1：全く当てはまらない」から「5：非常に当てはまる」までのいずれかを選択させる5段階評定で，得点が高いほど地域における教育を受けた経験の度合いが高いことを示す．

この地域の教育力尺度については事前に因子分析をおこなった（最尤法，プロマックス回転）．この結果では,「地域社会への参加」と「仲間との交流」という2因子構造が認められ（表1），尺度全体のα係数も．78，第1因子，第2因子のα係数はそれぞれ.74，.72であり，信頼性を十分に満たす値であった．よって，以後の分析では地域の教育力尺度として使用する．

結　　果

「社会的かしこさ」尺度の因子構造

「社会的かしこさ」尺度69項目について，因子分析（主因子法，プロマックス回転）をおこなったところ，固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮すると4因子構造と判断することが妥当であると考えられる結果であった．そこで，いずれの因子についても因子負荷量が．40未満の項目を除いて，同様の因子分析を繰り返しおこない，最終的に35項目を「社会的かしこさ」尺度として採択した．「社会的かしこさ」尺度の因子分析結果を表2に示す．

第1因子において高い負荷を示す項目は，“トラブルに冷静に対処できる”，“正確に状況把握ができる”，また“知識を応用，工夫することがうまい”などの項目であり，これらの項目から正確な状況判断や物事を解決する能力を表していると考えられるため「状況判断・課題解決能力」と命名した．

第2因子において高い負荷を示す項目は，“相手の立場を良く考えて行動している”や“周りのことを考えて行動している”などの項目であった．第2因子を構成する項目は，他者や周囲の人間への気遣いを示していると考えられるため,「他者・周囲への配慮」と命名した．

第3因子において高い負荷を示す項目は，“ユーモアがある”や“人間として面白い”また，“人づきあいがうまい”などの項目であった．これらの項目より第3因子は，人間の表現力や自己の内面について説明していると考えられ,「自己表現力」と命名した．

第4因子では，“すぐに感情的になる（逆転項目）”や“自分を抑えるのが苦手である（逆転項目）”などといった感情の制御についての項目が高い負荷を示

表1　地域の教育力尺度の因子分析結果（最尤法，プロマックス回転，n=562）

	地域社会への参加	仲間との交流
8. 公民館や児童館など地域の施設や団体がおこなう行事に参加することがあった。	.83	-.12
7. ボランティア活動に参加することがあった。	.61	-.15
9. 夏祭り，秋祭りなどの地域の行事に参加することがあった。	.59	.16
4. 顔と名前を知っている近所の人がいた。	.49	.17
5. いつも「おはよう」などの声をかけてくれる近所の人がいた。	.47	.17
6. 家の周りに，いたずらをしたりすると怒る怖いおじさんやおばさんがいた。	.38	.09
10. 地域のスポーツクラブやボーイスカウトなどに参加していた。	.35	-.02
2. 休みの日に，家の近くの屋外で遊ぶことがあった。	-.07	.90
1. 学校から帰って，いつも一緒に遊ぶ友達が近所にいた。	-.07	.69
3. 家の周りの公園や山や川など自然の中で遊んだりすることがあった。	.21	.47
因子間相関		.51

しているため,「感情のコントロール」と命名した.

尺度全体のα係数は．89であり，各因子については第1因子.88，第2因子.83，第3因子.81，第4因子.74であり信頼性を十分に満たす値であったと考えられる．

「社会的かしこさ」と家庭でのしつけ，学校生活経験，地域の教育力との関連

「社会的かしこさ」と家庭でのしつけ，学校生活経験，地域の教育力といった要因との関連を検討するために,「社会的かしこさ」尺度と子どもの頃のしつけ経験測度，学校生活経験測度，地域の教育力尺度との相関係数を算出した．その結果を表3に示す．

「社会的かしこさ」に影響する要因の検討

家庭でのしつけ，学校生活経験，地域の教育力が「社会的かしこさ」とその下位因子へ及ぼす影響を検討するためにステップワイズ法により重回帰分析をおこなった．「社会的かしこさ」とその下位因子と子どもの頃のしつけ経験測度，中学・高校における学校生活経験測度，地域の教育力尺度との重回帰分析の結果を表4に示す．

重回帰分析の結果より，回帰式全体の決定係数（R^2）は，「社会的かしこさ」尺度とその下位因子においてすべて有意であった．重回帰決定係数は，第4因子「感情のコントロール」において低い値であった．

表2 「社会的かしこさ」尺度の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転，n=562）

	状況判断・課題解決能力	他者・周囲への配慮	自己表現力	感情のコントロール	共通性
1. 正確に状況把握ができる。	.730	.067	-.139	.023	.516
4. トラブルに冷静に対処できる。	.681	-.114	.007	.228	.510
3. 知識を応用、工夫することがうまい。	.657	-.158	.174	-.079	.463
9. 機転がきく。	.591	.005	.191	.056	.510
41. 物事をうまくまとめられる。	.587	.028	.158	-.072	.463
20. 臨機応変である。	.570	-.008	.149	.054	.435
33. 仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができる。	.569	-.022	.103	-.018	.371
12. 仕事をするときに、何をどうやったらいいか決めることができる。	.568	.087	-.031	-.081	.347
2. 社会的に広い視野を持っている。	.525	.067	.020	-.012	.324
10. 現実的なものの考え方をしている。	.510	.089	-.305	.078	.276
61. 情に流されず、物事を理性的に処理する。	.508	-.075	-.024	.231	.313
53. 現実の場を正確に判断する。	.495	.165	.044	-.005	.380
30. 相手の立場を良く考えて行動している。	.045	.724	-.030	.000	.547
29. 周りのことを考えて行動している。	.098	.655	-.031	-.043	.480
67. 他人への配慮、思いやりがある。	-.012	.636	.112	-.072	.434
22. 人から嫌な思いをさせられても、その人の立場に立ってみて考える。	-.031	.542	-.055	-.008	.265
21. 他人の気持ちを敏感に感じ取る。	.184	.523	-.030	-.153	.373
43. 何かの決定をするときは、立場の異なる意見にも注意を払うようにする。	.025	.501	-.066	-.129	.239
7. 人を批判する前に、もし自分がその人の立場だったらどうかと考える。	-.049	.500	-.112	.015	.219
38. 意見の違う人とも協力し合える。	-.132	.486	.184	.153	.288
40. 場の雰囲気を読み取ることができる。	.273	.451	.049	-.072	.414
24. 周りの人ともうまく協調していける。	-.155	.445	.411	.180	.403
39. どのような問題にも必ず賛成と反対との立場があるので、その両方を見る。	.179	.423	-.035	-.028	.270
34. 自分とは違う意見も素直に受け止められる。	-.130	.404	.087	.146	.177
47. ユーモアがある。	.034	-.030	.739	-.013	.561
62. 人間として面白い。	.017	.001	.709	-.029	.517
27. 人づきあいがうまい。	-.059	.101	.665	.187	.474
69. 表現力に優れ、見せ場を作る。	.175	-.071	.608	-.145	.492
54. センスが良い。	.289	-.041	.487	-.116	.436
68. すぐに感情的になる。	.070	-.047	-.150	.661	.475
64. 自分を抑えるのが苦手である。＊	.018	.179	-.223	.632	.522
42. 日常のありふれたことにも、悩み、いらだってしまう。＊	-.117	-.057	.223	.601	.347
60. 喜びや怒り、悲しみなどの感情をコントロールできる。	.151	.136	.062	.551	.443
11. ちょっとしたことで、気落ちする。＊	.091	-.210	.225	.481	.278
63. 衝動的な傾向がある。＊	.090	-.074	-.265	.446	.281
因子間相関		.506	.462	.209	
			.266	.191	
				-.051	

＊：逆転項目

表3　「社会的かしこさ」尺度と子どもの頃のしつけ測度，学校生活経験測度，及び地域の教育力尺度との相関係数（n=562）

	「社会的かしこさ」尺度全体	状況判断・課題解決能力	他者・周囲への配慮	自己表現力	感情のコントロール
子どもの頃のしつけ測度全体	.315 **	.319 **	.241 **	.308 **	-.030
男性役割	.319 **	.359 **	.224 **	.212 **	.025
女性役割	.182 **	.150 **	.158 **	.273 **	-.070
学校生活経験測度全体	.452 **	.388 **	.377 **	.368 **	.091 *
文化と教養	.206 **	.221 **	.202 **	.104 *	-.018
クラスの人気者	.380 **	.219 **	.323 **	.337 **	.221 **
リーダーシップ	.212 **	.207 **	.176 **	.135 **	.035
流行追随	.227 **	.187 **	.180 **	.340 **	-.063
学業成績優秀	.204 **	.220 **	.145 **	.085	.073
地域の教育力尺度全体	.217 **	.152 **	.215 **	.158 **	.069
地域社会への参加	.195 **	.135 **	.190 **	.159 **	.054
仲間との交流	.171 **	.124 **	.173 **	.093 *	.069

** : p <.01　* : p <.05

表4　「社会的かしこさ」尺度と子どものころのしつけ測度，学校生活経験測度，地域の教育力尺度との重回帰分析結果（n=562）

	基準変数（β）				
説明変数	「社会的かしこさ」尺度全体	状況判断・課題解決能力	他者・周囲への配慮	自己表現力	感情のコントロール
子どもの頃のしつけ測度全体	.21 **	.23 **	.15 **	.23 **	
学校生活経験測度全体	.40 **	.33 **	.34 **	.31 **	.09 *
地域の教育力尺度全体					
R^2	.25 **	.20 **	.16 **	.18 **	.01 *

** : p <.01　* : p <.05

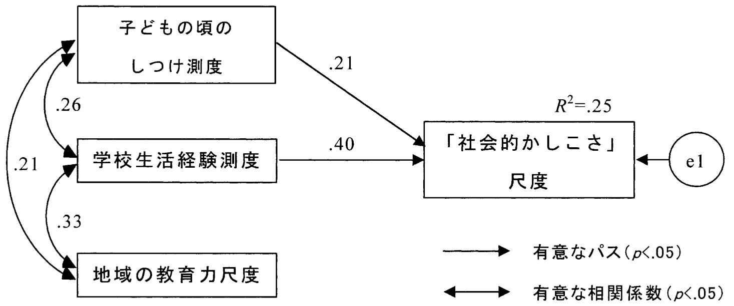

図1　家庭でのしつけ，学校生活経験，及び地域の教育力と「社会的かしこさ」の重回帰分析結果

「社会的かしこさ」尺度全体において中学・高校における学校生活経験測度からの回帰が最も強く（β =.40, p <.01），次いで子どもの頃のしつけ経験測度の回帰が認められ（β =.21, p <.01），地域の教育力尺度からの回帰は認められなかった．この結果は，第1因子「状況判断・課題解決能力」，第2因子「他者・周囲への配慮」，第3因子「自己表現力」においてもおおむね同様の結果が得られた．しかし，第4因子「感情のコントロール」においては中学・高校における学校生活経験測度からの回帰のみにとどまり，重決定係数も.01と低い結果が認められた．

図1は，子どもの頃のしつけ測度，学校生活経験測度，地域の教育力尺度を説明変数，「社会的かしこさ」尺度を基準変数とした重回帰分析について構造方程式モデルを用いおこなった結果である．図1の標準化推定値は5％水準で全て有意であった．適合度指標は，GFI=.999，AGFI=.987，CFI=.999，RESEA=.026，AIC=19.335であり，十分な適合を示したと考えられる．図1には，子どもの頃のしつけ測度，学校生活経験測度から「社会的かしこさ」尺度への標準偏回帰係数（それぞれβ =.21, p <.01；β =.40, p <.01），説明率（R^2 =.25）に加え，子どもの頃のしつけ測度と学校生活経験測度，地域の教育力尺度におけるそれぞれの相関係数を示している．

考　察

本研究の第1の目的は，「社会的かしこさ」尺度の内部構造の検討を行うことであった．「社会的か

しこさ」尺度の因子分析の結果,「状況判断・課題解決能力」,「他者・周囲への配慮」,「自己表現力」,「感情のコントロール」という4つの因子が抽出された.この結果から,大学生における「社会的かしこさ」とは上記の4つの側面から説明できる可能性を示している.この「社会的かしこさ」尺度の4因子構造は,久光・岩淵(2006)での6因子構造(「状況判断・課題解決能力」,「他者・周囲への配慮」,「自己表現力」,「感情のコントロール」,「大局的発想」,「内面的世界の充実」)とは異なる結果となった.前回得られた大局的発想因子と内面的世界の充実因子は今回は確認されなかった.大局的発想因子とは熟慮性や広い視野を持った行動傾向であり,内面的世界の充実因子は自己の内面や人間としての豊かさを説明する因子である(久光・岩淵,2006).今回この2因子が認められず,4因子構造が得られたことは,「社会的かしこさ」の構造を検討していく上での今後の課題であると考えられる.

この4因子構造は「社会的かしこさ」の定義と関連づけることができる.本研究では「社会的かしこさ」を「ある個人が,対自己・対他者・対状況を含む様々な社会的状況において,適応するための包括的な概念であり,全発達段階を通じて形成・獲得される社会を生き抜く力(社会的知恵)」と定義した.状況判断・課題解決能力因子はこの定義でいうところの対状況場面,他者・周囲への配慮因子は対他者場面,自己表現力因子は対他者場面と対自己場面,感情のコントロール因子は対自己場面における側面を示していると考えられ,本研究での「社会的かしこさ」の定義の前半部における対自己,対他者,対状況における適応と関連する.また,木下(2004)の社会的かしこさの事態認識的側面と情緒的側面との関連でみれば,事態認識的側面には状況判断・課題解決能力因子,他者・周囲への配慮因子,自己表現力因子,情緒的側面には感情のコントロール因子がそれぞれ対応すると考えらえる.以上から,本研究で得られた4因子構造は「社会的かしこさ」の概念と整合すると考えることができる.

「社会的かしこさ」全体,状況判断・課題解決能力因子,他者・周囲への配慮因子,自己表現力因子と男性的な役割を求めるしつけとの間に正の相関が認められた.このことは家庭でのしつけの中でも,男性的役割を求めることが重要となる可能性が考えられ,幼少時以降での個人の自立を促すような父性的なしつけがより重要となることが考えられる.自己の表現に関する能力では,男性的な役割と女性的な役割を求めるしつけとの関連が得られた.この女性的役割を求めるしつけとは主に服装などの自己表出に関するしつけである.さらに,自己表現の能力について男性的役割と女性的役割を求めるしつけの両方が認められたことから,自立的であり,自己の表出に意識的であるというしつけによって自己表現力が得られるということが考えられる.

「社会的かしこさ」と学校生活経験とも正の相関が認められ,「社会的かしこさ」は学校生活における豊富な経験と関連があることが明らかになった.さらに,「社会的かしこさ」全体と文化と教養因子や学業成績優秀因子との関連から,「社会的かしこさ」は一般的な教養に関する事柄が形成の素地となることが明らかになった.「社会的かしこさ」全体と学校生活経験における対人関係を示すと考えられるクラスの人気者因子,リーダーシップ因子の両方との間に正の相関が認められているが,クラスの人気者因子は,リーダーシップ因子と比較するとやや相関係数が高いことがわかる.他者・周囲への配慮因子や自己表現力因子とクラスの人気者因子との間における相関係数は他の相関係数よりも高い.このことから,対人関係において,集団のリーダーとなるような行動よりも,周囲の人間からの人気があるという他者からの高評価と「社会的かしこさ」との関連が示唆され,「社会的かしこさ」における対人的な適応の側面が確認されたといえる.

「社会的かしこさ」と地域の教育力との相関分析の結果では,「社会的かしこさ」全体,他者・周囲への配慮因子と地域の教育力全体において正の相関が認められた.地域の教育力と「社会的かしこさ」との間の関連が低かったことは,第2次ベビーブームの1981年度以降少子化が進み,地域から子どもの数が少なくなり,子どもの集まる祭りやイベントなどが姿を消すなど(内閣府,2004)[14],本研究にて想定していた地域の教育力が個々人へ与える影響が小さくなってきていることも関係があるかもしれない.

「社会的かしこさ」尺度における感情のコントロール因子は,他変数との相関係数の値が低く,また,因子間相関においても他因子との相関が認められないという結果となった.「社会的かしこさ」とは,本研究における概念にあるように様々な状況への適応に関するものである.「社会的かしこさ」における感情のコントロールには,単なる感情の抑制だけなく,状況に合わせた感情の抑制という側面が含まれる.本尺度にはこの側面が十分に組み込まれていない可能性があり,この点については今後の検討が必要である.

重回帰分析の結果から,「社会的かしこさ」は,学校生活における経験や親からのしつけからの影響を受けることが確認された.このことは,本研究の

仮説を一部支持するものであったといえる．木下（1999，2000）は家庭内の対人相互作用の低下や子育ての過保護化を社会的「かしこさ」の低下の要因としている．「社会的かしこさ」が家庭でのしつけから影響を受けるという本結果は，家庭内の対人相互作用が「社会的かしこさ」の形成の要因となる可能性を示している．また，学校生活での経験は，人間関係における経験から学業，文化的教育まで多岐に渡るが，このような幅広い経験が「社会的かしこさ」へ影響を及ぼしたことが考えられる．

家庭のしつけと学校生活経験，地域の教育力の3変数間の関連について，それぞれの間に有意な正の相関が認められ，それぞれが連携し合うことが予測された．しかし，家庭でのしつけと学校生活経験から「社会的かしこさ」へ有意な回帰が認められたが，地域の教育力からは有意な回帰は認められなかった．家庭でのしつけと学校生活経験の間に正の相関が認められ，その2変数から「社会的かしこさ」への回帰が認められたことは，家庭でのしつけと学校生活経験のそれぞれがつながりを持つことを示している．

本研究の結果,「社会的かしこさ」に関連する要因として，家庭でのしつけや学校生活よって得られる経験が重要となることが確認された．だが，これだけで「社会的かしこさ」へ影響を与える要因について十分に明らかになったわけではなく，本研究において取り上げた要因以外の様々な要因や経験によって「社会的かしこさ」が形成されることが考えられる．また,「社会的かしこさ」に影響を与える要因を検討したのみであり,「社会的かしこさ」がどのような過程によって形成されていくのかという時間的な推移を含めた検討をおこなうことはできていない．今後，本研究結果をもとに,「社会的かしこさ」の概念やさらなる形成要因との検討や獲得と形成に関する縦断的な研究計画をおこなうことで,「社会的かしこさ」の学習プログラムの作成のための試みへとつなげていくことが必要であると考えられる．

文　　献

1）経済産業省：「社会人基礎力」について．経済産業省，2006．2008年9月5日．
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm>

2）木下冨雄：IQから社会的「かしこさ」へ．心理学ワールド（日本心理学会），**5**，12–15，1999．

3）木下冨雄：社会的かしこさについて ― 社会化不全症候群とその背景．詫摩武俊・鈴木乙史・鈴木弘司・松井　豊（編），シリーズ・人間と性格　第5巻　性格研究の広がり，1–22，2000．

4）木下冨雄：社会心理学から見たパーソナリティ研究．パーソナリティ研究，**13**(1)，120–125，2004．

5）Mayer JD,Caruso D & Salovey D：Emotional intelligence meets traditional standards for an intelligence. *Intelligence*，**27**，267–298，1999．

6）Smith J & Baltes PB：Wisdom-related knowledge：Age/cohort differences in response to life-planning problems．*Developmental Psychology*，**26**(3)，494–505，1990．

7）高山緑・下仲順子・中里克治・権藤恭之：知恵の測定法の日本語版に関する信頼性と妥当性の検討 ― Baltesの人生計画課題と人生回顧課題を用いて．性格心理学研究，**9**(1)，22–35，2000．

8）高山緑：心理学的英知研究の流れ．東京大学大学院教育学研究科紀要，**37**，185–194，1997．

9）久光達也・岩淵千明：「社会的かしこさ」に関する研究（3）― 自己評価と客観的評価における因子構造の比較 ―．日本心理学会第70回大会発表論文集，217，2006．

10）岩淵千明・久光達也：「社会的かしこさ」に関する研究（2）― 性差・年齢差・因子構造の比較から ―．日本社会心理学会第47回大会発表論文集，686–687，2006．

11）小泉令三：学校・家庭・地域社会連携のための教育心理学的アプローチ ― アンカーポイントとしての学校の位置づけ ―．教育心理学研究，**50**，237–245，2002．

12）若林満・後藤宗理・鹿内啓子：女子短大生における性役割社会化と職業興味．名古屋大学教育学部紀要，教育心理学科，**33**，173–212，1986．

13）子どもの体験活動研究会：地域の教育力に向けた実態・意識調査．教育アンケート調査年鑑編集委員会（編）教育アンケート調査年鑑（上），創育社，931–956，2003．

14）内閣府：少子化社会白書，ぎょうせい，2004．

（平成20年12月1日受理）

The Structure of Social Wisdom and its Relation with Domestic Discipline, School Life Experience and Educability

Tatsuya HISAMITSU and Chiaki IWABUCHI

(Accepted Dec. 1, 2008)

Key words : social wisdom, home discipline, school life experience, educability

Abstract

This study attempted to construct a social wisdom scale as defined as social adjustment and to examine the relationships among social wisdom, home discipline, school life experience and community educability. Social wisdom was found to consist of four factors: assessment of the situation and problem solving ability, regard for others, ability in self-expression, and control of emotion. Low positive correlations were obtained between social wisdom and the three variables of home discipline, school life experience and community educability. A multiple regression analysis showed that social wisdom was predicted significantly by home discipline and school life experience, suggesting that these two variables would influence the development of social wisdom.

Correspondence to : Tatsuya HISAMITSU Doctoral Program in Clinical Psychology
Graduate School of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail: hisamitsu_tatsuya@yahoo.co.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.18, No.2, 2009 393–400)